

るのも一方法である。

(2) 局地性前線の発生又は強化に留意する。 このため、寒気のプール現象(移流性、滞留性)に着目するのが一方法である。これに加えて、地形によるもの一海、陸の温度分布や前述のようなローカル・アナリシスを最大限に活用することが大切である。このため、最低気温や最高気温の出現時や、隣接地点との水平温度傾度(例へば前橋—東京、東京—大島、小名浜—東京、大島—八丈島等)の増大に注意する。

(3) 富士山によって代表される付近 上層の流れおよび気象状態の変化に注意する。

以上は東京を例にとつての短期予報のブラクティカル・テクニクの一つを示したものである。

5. おわりに

〔書評〕

斉藤錬一、荒井隆夫編：全国農作物栽培分布図説

A 5 版, 188頁, 1959年 5 月, 東京堂発行

主として農業家のための本書を、気象学会の機関誌である本誌の紙面を借りて、しかも、農業のズブの素人である私が、オコガマシクモ書評するということは僭越至極なことである。それにもかかわらず、あえて筆をとつたのは、編集された斉藤、荒井の両氏は気象学、農業気象学のそれぞれ優れた専門家であり、内容的にもわれわれ気象技術者に重要な知識を与えているからである。

われわれ気象技術者は、気象を利用する一般の人々と主として気候と予報の面で接触している。気候は風土の一要素として理解されている。風土は生活の仕方によって受取り方が違っている。われわれとしては、この気候の理解のされかた。その内容を問題としなければならないのだが、これらに対するわれわれの知識は皆無に近い。本書は農作物栽培の分布図を通じて、風土の一端をわれわれに教えてくれる。しかし、そのような理解をするためには本書の内容をわれわれの目的のために整理しなおすような読み方をしなければならない。われわれとしては不満だが本書の目的外のことであり、仕方のないことであろう。

本書の内容は大別して2編に分かれ、前編は農作物の収穫面積分布図と解説、後編は農業気候図表となっている。前編の書き方は農作物種類別に、すべて見開きに、左頁には栽培面積分布図を都市別の単位で、右頁には名称性状、由来・分布・用途・栽培の各項に分けて、それ

局地変化の主因の一つとなる局地的フロント・ゲネシスに重要な役割を演ずる小規模な寒気の出現、状況に注目し、sequentialなローカル・データを解析し、マップ・アナリシス(上層、地上)だけでは検出困難な予報上の手がかりを得ることが必要である。各地特有の予報困難なケースについてはそれぞれ有効な予報法が検討されているであろうが、問題は非常に限られた区域における天気現象を何時間前に予想できるかということである。すなわち、一般的には解析の結果、好天が予想される大きなスケールの資料に対して、急激におこる局地的な悪天の予想に有効な小さなスケールの解析に役立つデータが予報発表時の何時間前に得られ、解析されるかということであろう。

それ簡単ではあるが、要領をえた解説がしてあり、読者が非常に読みやすいように編集してある。後編は農耕に必要なと思われる各種日平均気温の年間の日数分布図およびその表、積算気温分布図、積算気温表、暖候期の平均気温雨量、日照時間の分布図、台風経路図、屋外労働の適・不適日数の分布図および1日あたりの可能時間表、霜の季節表、農業気象暦等、他の本では見られない内容が盛られている。屋外労働の図表は農業以外にも大いに参考になるだろうと思われる。図は鮮明であり、開巻色刷りの農耕地および水田裏作分布図は編者の自慢するだけある貴重な成果である。

気象家の立場からすれば、若干の不満なしとしない。それをここで一言して编者および書店に対する注文とし、他日、われわれに教示していただければ幸甚と考えらる。

(1) 各種農作物の栽培期間の生育区分をもっと詳細に記述して欲しかった。

(2) 気候の影響の仕方についての解説が乏しいうらみがある。

(1)と(2)の両者を詳細になると、相当な分量となるので問題と思われるが、(1)だけでも是非記述して欲しかった。われわれが予報と気候を基にして農家と接触する場合に、まず基礎となる知識だからである。

(奥田 穰)